

## 「QOL評価への期待」

井手玲子

(産業医科大学産業生態科学研究所臨床疫学教室)

健康関連QOL評価というテーマに取り組んだ当初は、主観的なものを客観的に評価するというこの哲学的パラダイムのおもしろさと困難を予想することはできなかった。私の専門は、産業保健と疫学である。産業歯科保健事業の評価指標として口腔関連QOLを活用することが、この研究に取り組むきっかけであった。

指標の作成にあたっては、既に諸外国で活用されていたOral Health Impact Profile (OHIP)の翻訳版を作成することとした。OHIPは「機能的な問題」「痛み」「不快感」「身体的な困りごと」「心理的な困りごと」「社会的な困りごと」「ハンディキャップ」の7領域49の質問項目からなる。翻訳にあたっては、言葉の等価性を重視すると直感的な理解が困難になる。例えば、disabilityを困りごとと訳した英和辞典はたぶん見当たらないと思うが、こう訳す方がなんだかしっくりする。Thurstone method of paired comparisonという統計手法を用いて国際間比較を行っている論文もあるが、何をもって等価であると判断するかは、大変難しい問題であると個人的には感じている。

実際に職域の場面、つまり青・壮年期の成人を対象に活用するにあたっては、2つのハードルが存在した。ひとつは、高齢者用に作成されているためデータの偏りが生じることである (Floor effect (底打ち効果))。もうひとつは、質問項目が多いので活用ににくい。そこで、18項目の短縮版OHIP-JA18を作成した。これはすでに労働衛生機関のプロトコルに取り入れられ、個人や事業所単位への報告書にもその結果が活用されている。実

際に記入する参加者の方、その情報を活用して指導をしている専門職の方からクレームがないところをみると、OHIP-JA18は現場の活動になじんでいるのではないだろうか？

ある会議で専門家ではない事業所の要職の方にOHIPの結果を説明する機会があった。上記の7つの領域をコンセプトモデルに当てはめて説明したところ、とてもよくわかるのご意見を頂いた。口腔関連QOL評価、OHIPは一般の人々と我々専門職の感覚をつなぐかけ橋の役割をすると実感したひと時であった。歯科保健がターニングポイントを迎えている現在、こうして得られる一般の人々の視点での情報そして評価こそ、今後の指針に反映させるべきであろう。

最後に、OHIP日本語版の使用については、手続きは不要である。短縮版として、青・壮年期を対象としたOHIP-JA18 (臨床の問診表としても活用可能)と補綴治療評価のためのOHIP-JP16 (高齢者対象に活用可能)を作成した。論文や抄録を参考に身近な場面でご利用頂ければ幸いである。

### 【著者連絡先】

〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1番1号

産業医科大学産業生態研究所臨床疫学教室

井手玲子

Tel : 093-691-7403 Fax : 093-603-0158

E-mail : r-ochide@med.uoeh.ac.jp